

---

# 受験の日に君と再会して

一言 真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

受験の日に君と再会して

### 【Nコード】

N0437K

### 【作者名】

一言 真

### 【あらすじ】

有紀は受験生で、二日間のセンター試験に挑むが、そんな中、小  
学生のころの友達と再会する。青春短編小説。

鏡を見つめながら、「よし」とつぶやく。眉をきつと寄せて、強く声を絞り出してそう言った自分の顔は、緊張のあまり強張っていて、私は胸に手を置きながら軽く息を吸う。

大丈夫。大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせて、机の上のバックを取ると、私は部屋を出る。階段を降りながら、頭の中に英単語を一つ一つ思い返して、同時にその訳も確認する。

玄関に向かうと、姉さんが、壁に背を寄りかかせて腕を組んで立っていて、ちらりと視線を上げると、にやりと微笑む。

「緊張しているわねえ、我が妹」

私の緊張ぶりを見て可笑しそうに笑っている姉さんを見て、私はむっとなる。

「うつさい。自分が受験生じゃないからって調子のんなよ、年増」

その言葉に、姉さんがぴくりと体を震わし、額にミミズを浮かばせる。

「年増ってね……あんと私はたった三歳しか変わらないでしょうに」

「年齢の割に老けてるじゃない。実際の年より十歳は上に見えるわよ」

なにい！ と姉さんは今にもつかみかかってきそうな鬼の形相で、壁に寄せていた身を起こす。けれど、怒りをこらえるように唇を引き結んで、額のミミズをぴくぴくと微動させながら「まあいいわ。今日は見逃してあげる」とつぶやき、再びにやけた笑みに表情を切り替える。

私はそんな姉さんを意にも留めずに、さっさと靴を履いて、ドアノブをつかむ。

「まあ、がんばってきなさいよ」

姉さんは腕を組んで玄関に立ちながら、そう不敵に笑う。

私は振り向かずただ「行ってくる、年増」とつぶやき、ドアを開く。

背後から、なにい！ と再びけたたましい声が聞こえてきたが、ドアをぴしゃりと閉めて遮った。

歩き出す。緊張のあまりわずかに震える体を、抱きしめるように腕を組んで、顔を打つ凍えるような夜気にそつと白い吐息を吐き返す。

私は灰色の空をきつと睨み据え、心の中でつぶやく。

絶対に合格してやるんだから。

受験会場の大学に行つて、指定の教室に向かう。部屋の中に入つた途端、暖房の生温かな空気が肌に優しく触れると共に、静まり返つた室内に淡々と参考書のページをめくる音や英単語を復唱する声が聞こえてきて、身が引き締まる。

胸の鼓動が早まったのを感じながら、私は胸を押さえて自分の受験番号の席へとつく。

同じテーブルについた男の顔を見た途端、私はため息をついた。

「なんだよ、その反応」

男は背中まで届くロングストレートの髪を振り乱して、他の受験生がいるのも構わず大声で言う。

私はすぐにシッ！ と口元に指先を突き立てて、男の声を遮ると席につく。

「なんだいその、真面目くさつた態度は」

「あんたと違って、私はちゃんと受験生やってるの！ 受験中に力ニングしたら承知しないからね！」

「げっ。どうしてわかるんだ」

男は明らかに狼狽した顔を浮かべて、大きな目を困惑で揺らせる。私はため息をつきながら、鞆から参考書を取り出してかじりつく。

「まあまあ、真面目に勉強しちゃって、まあ」

この男は、春先良太と言って、同じクラスに在籍する不良だ。平

気で一週間に三日ほど学校をすっぱかすし、廊下で美人を見かけるならば生徒教師の区別も構わず言い寄り、平手打ちを食らうまであきらめようとしないうる男だ。

何度か席が隣になったことをいいことに、私に話しかけるようになり、馴れ馴れしい、と私のはねのけても、持ち前の粘り強さもとてい執拗さで強引に私の声をねじ伏せておしゃべりな口を動かすことをやめない。

「俺、勉強してないんだよね。昨日ちょっと参考書見ただけだし。有紀ちゃんと同じ大学行けるかわからないよ」

私が耳にイヤホンを差し込んで言葉をシャットアウトしているのも構わずに、春先はなれなれしく私の肩に手をかけてそう喋りたてる。

私はその手を払いのけても、何か言葉を吐く度<sup>たび</sup>にいやらしく手を載せて肩をさすってくるので、私はいい加減キレて、その手をつかんでひねり上げた。

「いててて、有紀ちゃん、強引だねえ」

私が腕をひねり上げながら睨みつけても、春先は身をよじりながら苦しげに笑みを浮かべるだけで、その手を私の肩に差し向け続ける。

「あんた、いい加減にしなさいよ。毎日毎日私に話しかけてきて。うんざりしてんのよ」

「毎日じゃないよ。俺よく学校休むし」

私は腕をひねりあげるのも面倒くさくなつて、ぱいっとつかんだ手を投げ出すと、参考書を持って席を立った。

「あら、行っちゃうの、有紀ちゃん」

その言葉に何も返さず、私は早足で部屋を出て行く。

春先が立ち上がったのを見て、私は急いで部屋を出ると、非常階段沿いにベンチのある喫煙所があるのが見えて、そちらに駆けだした。

その時、突然曲がり角から人が現れて、私はその人と頭を打ち合

わせた。

頭頂部に電流の走るような鋭い痛みが広がり、私は咄嗟に頭に手を当てて、こんな石頭してんのは一体どんな奴なんだろうと腹立たしげに視線を上げた。

すると、そこには同じく頭に手を当てた男子学生が立っていて、彼は痛みに動じないように澄ました顔をしていて、その整った目鼻立ち、雪のように白い肌が私の目を惹きつけた。掛け値なしの美少年だった。

背が高い彼は、私を見下ろして一瞥をくれると、「大丈夫か」と低くつぶやいた。その声は、波の立たない水面のように冷静で感情がこもっておらず、私の怒りに逆立った胸が冷水を浴びせられたように急にしんと静まり返る。

「大丈夫です」

私は歩き出しながらそう言ったが、まだ少年の顔から目が離せず、顔を引つ張られるように少年の方へ向けている。

「そうですか。良かった」

少年は依然と起伏のない声でそう言うと、すぐに背を向けて歩いてしまった。私は彼の背中に自分の目が張り付いたように、彼の姿を目で追っていたが、少年の肩越しに、春先がこちらに駆けってくるのが見えてぎょっとし、すぐにまた走り出した。

柱の影に隠れて春先をやり過すと、私はため息まじりに屋外の喫煙所へと入った。背の高い壁越しに、身を震わす冷気が喫煙所に差し込んできて、私は身を縮みこませながらベンチにつく。

そしてそつと参考書を広げると、すぐにページに目を落とし、勉強に意識を集中させた。

まったく、春先の奴、ほんとウザい。

頭に英単語を次々と並べ立て、それを読み上げながら、心の中でそう毒づく。

受験の日にまで言い寄ってこられたらたまらない。あんな奴は横

転したダンプカーの下敷きになって庭先に洗濯物と一緒に吊るしあげられればいいんだ。

そのまま憤然と参考書をめくっていると、突然ガラス扉が開いて、校舎から女子学生が出てきた。彼女の整った顔が青白くなり、彼女はしきりに背後が気になるように振り返りながら、ベンチに近寄ってくる。

その時、彼女の肩越しに、硝子扉がらすの向こうで春先が顔を四方へ振り向けて何かを探しながら歩いてくるのが見え、彼女もそれに気付いたのか、肩をびくんと大きく飛び跳ね、こちらに後ずさってくる。彼女の状況を理解した私は、「早くこっちへ！」と彼女の腕をつかんで、植え込みの陰に身を縮ませる。

ほどなくして、誰かが喫煙所の扉を開ける音が聞こえてきて、「美人ちゃん、いないのかい？」と歌うような上機嫌な声が響き渡った。その声に、隣で息を潜ませている彼女の体が大きく震えたのがわかる。数秒の沈黙の後、「いないなあ」と残念そうな声が聞こえ、ぴしゃりと扉が閉まる音がした。私は植え込みから顔を上げて、ガラス壁の向こうで春先が廊下の先へと遠ざかっていくのを確認して、大きく息を吐いた。

春先に追われていた彼女は、私と一緒にしばらく喫煙所で勉強をして、それから二人で校舎に戻り、彼女の教室の前で別れた。

ほんとうに、ありがとうございました、と彼女は礼儀正しく頭を下げると、再び教室へ戻って行った。私はそれを笑みを浮かべて見送ると、一つ息を吐いて、自分の教室へ戻って来た。

教室に入った瞬間、席についていた春先が嬉しそうに手を振ってくるのを見て、額に手を当てて嘆きながら、席についた。

「あんた、受験の時まで女の子をナンパすのね。その執念に頭が下がるわ」

「何何？ 俺、褒められてる？」

嬉しそうに自分の顔を指差す春先に、「あんたねえ……」と声を

荒げそうになったが、ふと隣の席に座る男子学生が、先ほどの美少年であることに目が留まった。

彼は、じっと眼を閉じながら微動だにしない。

一体なにしてるんだらうと彼を見つめていると、横から春先が身を乗り出してきて、

「何だアイツ、瞑想でもしてるのか？」

私はそんな春先を見て、ふと閃き、男子学生をうつとりと見つめてこうつぶやく。

「ああやって瞑想している人、素敵だね。私、将来は修験僧か、有名なお坊さんのお嫁さんになりたいのよね」

そう言くと、春先は私と男子学生の顔を交互に見て、「俺も瞑想得意なんだ」と胸を反らして言い、目を瞑って途端に静かになった。かかったわね、と私は薄く笑みを浮かべて、残りの時間、試験勉強のラストスパートに全力を上げた。

ほどなくして試験が開始され、私はいつまで瞑想してるんだらう、とちらりと隣の春先を見やると、春先は机に頭を横たえて、ぐーぐー寝息を立てていた。

今日の分の科目の試験が全て終わり、私はため息交じりに筆記用具をバックの中に片づける。

横から春先の音程のずれた鼻歌が聞こえてきて、やっと終わったぜーとかなんとか、リズムカルにつぶやいている。

「ねえ、有紀ちゃん、この後どつかでお茶しない？」

「あんだねえ。明日もまだ試験が残ってるでしょう。私は勉強があるの」

「なんだよ、真面目くさっちゃって。俺は有紀ちゃんの伸び伸びしたところが好きなんだよ」

「伸び伸びしてるのはあんだの方でしょうに」

そんなやり取りを続けながら、ちらりと隣が気になって視線を向けると、端正な顔の男子学生は、相変わらぬ無表情で、淡々と筆

記用具や受験票を鞆に仕舞っている。そのまま鞆を抱えると、部屋を出て行く。

その後ろ姿が見えなくなるまで見届けると、私はバックを肩に提げて、「さて帰るか」とハンドサイズの参考書に目を落しながら言う。

颯爽と教室を後にすると、後ろから「待つてよ、有紀ちゃん」と春先が追ってくる。

無視しながらそのまま校舎を出て、駅前の通りを歩いてちらりと後ろに振り返ると、まだにこにこした笑みを浮かべながらついてくる。

「ついてくんなよ」

私が半睨みすると、春先は笑みを崩さずに胸の前で手を振って、「だって俺もこっちの方向に行くんだもん」

とつぶやいて横に並ぼうとする。私は一層早足で歩きながら、

「だったら、十分ここで立ち止って、それから歩き出して」

「十分もしたら、有紀ちゃんを見失っちゃうじゃんか」

「やっぱりつけてるんじゃないのよ」

私は振り返りざま、参考書でそのロン毛頭をひっぱたく。春先は叩かれて嬉しそうに頬をほころばせ、「有紀ちゃん」と甘えたような声を出す。

私はその声に鳥肌が立ち、肌をさすりながら振り返らずに駆けだした。そのまま駅の構内に入り、改札口まで一気に走ると、ふと足音が追ってこないことに気付き、振り返った。

春先は別の改札口の前で立ち止り、こちらに大きく手を振っている。私は顔をしかめた後、親指を立てた拳を逆さまにして振り下げる。その後、前に向き直って、SUIKAを改札の機械の上に荒っぽく叩きつけた。

まったく。春先と一緒に受験を受けることになるなんてとんだ悪夢だわ。災難だわ。

自分の運のなさをとことん嘆いて、肩をしょんぼり落しながら、

私はホームへ降り立った。

結構人がこんでいたので、私は一番前の車両に乗ろうと、ホームの一番端っこへと歩いていった。

そこで参考書を広げて立っていると、前に並ぶ背の高い男子学生の後ろ姿に見覚えがあることに気付き、見ると、やっぱり私の隣に座っていたあの学生だった。

彼はホームに流れ込む強い風に、つややかな長めの髪をさらさらと揺らせて、涼しげな顔で線路の向こうを見つめていた。その横顔が妙にりりしくて、私は思わず彼に見とれて、参考書を手から振り落としそうになった。

一方そんな間抜け面の私に、誰かが横を通り過ぎる際に、体をどんと大きくぶつからせてきて、私は横へ体をつんのめらせながら、何するのよとばかりその男の背中を睨む。

二十歳前後くらいのその男は、コートのポケットに両手を突っ込んだまま、ぶつぶつと何か独り言を囁き、ホームの黄色い線の前へ進み出た。そこで、線路を見下ろしながら、何か考えを巡らすように虚ろな目を動かしている。

私は内心キシヨ、と思いながら、よろけた体をもう一度立て直し、ちらりと再び背の高い男子学生の方を見た。彼も、ホームの端に立つ男のことが気になるように、そちらにちらちらと視線を向けている。危ないですよ、とでも声をかけようとしているのだろうか。

その時、男子学生が、私の視線に気づいたようにこちらに振り返った。私は体を飛び跳ねて、真っ赤な顔で視線を逸らし、参考書を顔に近づけてかじりつく。男子学生は数秒の間私を観察するように眺めていたけれど、気にした風もなく、再び前に向き直った。同時に私は大きく息を吐く。

そのまましばらく参考書のページをめくっていると、ホームに電話が通過します、とアナウンスの声が響き渡り、私は依然とホームの端に立つ男が気になって、注意しようかと口を開きかける。

けれど、私が言葉を発するより早く、電車がホームに入って来た。

その途端。ホームの端に立っていた男が、地面を蹴った。

男の体が宙に浮き上がる。傾いた顔が電車の方を向き、ほっとしたような嬉しそうな笑みを浮かべたような気がした。その瞬間、男の体が電車の前面に激突し、男の首が妙な角度にひねり曲がり、男の体が鈍い音を立てて弾け飛ぶのが見えた。

私は開いた口から、声にならない絶叫を絞り出して、頭に両手を当てて、膝をついた。

電車はほどなくして停車し、ホームは騒然となる。

駅員が男の立っていたホームの隅へと駆け寄る中、私は目を見開いたまま、男のひしゃげた体が宙に舞う様を思い返し、喉に込み上げてくるものを感じていた。

その時、私の顔に大きな影が差しかった。見上げると、先ほど前に立っていた男子学生が、「大丈夫ですか」と私の顔を上からのぞきこんでいた。

私は答える気力もなく、うつと口を手で押さえる。彼はすばやく自分の鞆からビニール袋を出すと、私の口の前に広げて差し出した。私は堪え切れず、中のものを大いにぶちまけた。

鼻につーんとした痛みが広がるとともに、汚物で詰まったビニール袋から生臭く酸っぱい匂いが立ち込めてきて、私はもう一度吐きそうになった。

「大丈夫ですか」

臭気を放つ私の汚物を前にしても、眉ひとつ動かさず、彼は依然として感情のこもらない無表情で私を見下ろしてそう言った。

私は小さくうなずき、汚物の入ったビニール袋を受け取った。

「ごめんなさい」

私はやっと途切れがちな声を出して謝った。するとそこで彼は初めて微笑みを見せ、うなずいてみせた。その顔が本当に綺麗で、美しく、白い百合の花のような肌が淡くほころび、その清々しさが私の胸を大きくついた。

私は目を見開いたまま、彼の顔を凝視していたけれど、彼が突然

腕を伸ばしてきて、その手を私の背中<sup>せなか</sup>に当ててさすり出したので、私はぎよつとして顔をまっ赤っ赤にして顔を俯かせる。

「災難でしたね。自殺の現場を見ちゃうなんて」

彼は優しくそう言いながら、その大きな暖かな手で私の背中をさすってくれる。私は真っ赤になった顔をうなずかせて、手元にあるビニール袋を見下ろした。

思いっきり吐瀉物<sup>しゃく</sup>をぶちまけたところを見られてしまつて、本当に恥ずかしかった。同年代の男の子にこんな姿を見られるなんて、と私は恥ずかしさで再び顔が真っ赤になる。

私は立ち上がると、「もう大丈夫です」と微笑み、ビニール袋を近くのゴミ箱へと突っ込んだ。

「明日も試験が控えてるつていうのに、とんだ災難に出くわしたものですね」

男子学生はそう苦々しげに笑つて私の参考書を見つめる。

「どこの大学目指してるんですか？」

私は掛け値なしの美少年を前にして、緊張してしまい、短く息を吸つてから、言葉を紡ぎ出す。

「慶応目指してるんですよ。とても合格するようには思えないけれどね」

「あ、俺と同じだ」

男子学生は花もほころぶような澄んだ微笑みを浮かべて、それがまた私の鼓動を跳ね上げた。

私は耳まで真っ赤になりながら、「そうなんですか」とどこか裏返った声を上げる。

「どうでしたか、今日のテストは」

「そうですね、まあまあ<sup>まあまあ</sup>の出来です」

春先の奴の顔が頭に浮かんだ。あいつのせいで、私の実力は三分の二ほどしか発揮できなかっただろう。

「俺とあなた、隣同士の席だったんですよ。気づいていましたか？」  
男子学生はそう微笑みながら言う。そりゅあ、こんな美少年が隣

にいて気付かない訳がないだろう、と思いながら「ええ」とうなずく。

「私と同じ机の席に座ってた奴、テスト中寝てたんですよ」

「ええ、わかります。試験中、大きないびきが聞こえていたから」

男子学生は白い歯をのぞかせてさわやかに笑う。私の胸がとくと一鳴りする。どうしてこの人の見せる仕草に、こんなに反応してしまうのだろうか。

私は忙しない胸の鼓動を抑えながら、彼の顔を見返す。彼は私の顔を見つめたまま口を開き、

「電車、しばらく動きそうにもありませんから俺、改札口にあるカフェで勉強してきます」

そう言っ、では、と頭を下げ歩いていく男子学生に、私はなぜか彼の後を追って、気づけば「私も行きます」とつぶやいていた。

カフェはだいぶ人が込み合っていて、生温かな空気に、人の話し声が行き交い、店員がレジであたたかく客に対応している。

私はトレイを持ちながら、男子学生と一緒に隅の席に向かい合わせに座った。別々の席に座ろうと思っても、席はすでに埋まり切っていたので、こうするしかなかった。

私は少し緊張を感じながら、ちらりと視線を彼に移す。彼は、澄ました無表情で、淡々と鞆から参考書を出すと、勉強に集中し始めた。私はコーヒーを一口飲んで、気分を落ち着けると、彼にならって参考書を読みだす。

そのまま数分が経過して、再び顔を上げると、彼が私をじっと見つめていて、私の心臓は大きく飛び跳ねた。

「な、なんですか」

「さっきから思ってたんですけど」

彼が依然と私の顔を食い入るように見ながら、首を傾げて見せる。「あなた、常盤有紀さんですか？」

私の目が見開かれる。どうして私の名前を。そうつぶやく前に、

彼が口を開き、

「小学校の時、同じクラスだった野島です。野島信吾」

彼は無表情を華やかな笑顔に変えて、そう言う。その凜とした声が、私の頭の中にこだまして、ふと、小学生時代に仲の良かった男の子の顔が浮かんだ。

短髪に、整った顔を優しくほころばせて、私に微笑む様子が目に浮かぶ。

「し、信吾君？」

私は素っ頓狂な声を上げて、彼の顔を食い入るように見つめる。よく見ると、確かに小学生の信吾君の面影がある。

「やだ。私、気付かなかった」

口に手を当てて驚く私を、信吾君は薄く微笑んで見返し、

「俺もさつき気付いたんですよ。何年ぶりですか？ 九年？」

「ほんと久しぶりね。背も高くなっただし、大人っぽくなっていたから、わからなかったわ」

「有紀さんこそ、すごい美人になってたからちよっと見ただけじゃわからなかったよ」

そう言いながら懐かしそうに微笑む信吾君。私は信吾君の言葉に顔が熱くなり、慌てて顔を俯ける。

「本当に久しぶりだね、有紀さん」

そう言う信吾君の表情はすぐ穏やかで、澄んだ瞳を細くして微笑む姿は、いつか見た信吾君の優しい表情と重なって私の胸を暖かく、そしてどこか切なげに包み込んだ。

どこか夢見心地なぼんやりとした顔で家に帰ってくると、姉さんが私の顔を見るなり、「どうしたの？ 失敗した？」と気の毒そうにつぶやいた。

あの姉さんが妹をこんな表情で気遣うなんて考えられなかったから、私は一瞬面食らい、しかしすぐに元のぼんやりした顔に戻り、「別にそんなじゃないよ」とつぶやく。

リビングに入り、あつたかいココアの入ったカップを手渡されたので、再びその気づかいに驚愕し、「ありがとう」と若干気持ちが悪いのを堪えて飲んだ。

口の中で、あまつたるい熱い液体が舌をまるやかに包みこみ、口内をほんわかとさせた後、喉を通って胃の中に暖かに流れ込んでいく。

「なんか顔色悪くない？ 何かあつたの？」

私がテーブルにつくと、姉さんが向かいの席に座って顔をのぞきこんでくる。

「飛び込み自殺を偶然目の前で見ちゃってさあ。今夜、夢に見そう」「それは災難だったわね。お風呂沸かしてあるから、すぐ入ってきなよ」

その言葉に、私はきよんとする。

「今日はどうしたの、ほんとに。いやに優しいじゃない」

「まあ、可愛い妹が受験に挑むんだから、そのくらいのこととしてあげようかなあつて」

姉さんは照れたように顔を脇へ向け、がしがしと自分の頭を掻<sup>か</sup>いてそう言う。

私はそんな姉さんを見て微笑み、「ありがとう」と言った。

姉さんは私のその言葉にぎよつとしたように肩を跳ね上げ、それから訝しげに私の顔をのぞきこんでくる。

「あんたこそ、何か変じゃない？ 何か嬉しいことでもあつたの？」

そう訊かれて、一瞬頭の中に、信吾君の優しいげな笑顔が浮かんで私は顔が赤くなって「なんでもない」と顔を俯かせた。

それを見た姉さんが「ははん？」と悪戯っぽく笑ってにやりとする。やばい、いじられる。そう直感的に判断した私は、身を強張らせたが、意外にも姉さんはそれ以上追及してくることもなく、私の空になったコップを取ると、流しへと持って行って洗い始める。

「ほら。さっさと風呂入ってきなさいよ」

そう言った姉さんの背中が、いやに広く、大きく感じられて、私

はきよとんとすると共に、うん、と素直にうなずいた。

翌朝、姉さんに叱咤激励されて家を出ると、受験会場に向かった。教室に行くと、早くも席に座って待ちかまえていた春先が、「有紀ちゃん」と手を振る。私はそれを無視して、席につくと、隣でじつと眼を閉じている信吾君へ振り向き、「おはよう、信吾君」とつぶやく。

すると、信吾君は瞼を開き、私の顔を見るなり、にっこりと笑みを浮かべ、

「おはよう、有紀さん」

とつぶやく。私は微笑みを返して、筆記用具をバックから出しながら、

「昨日はちゃんと眠れた？」と訊く。

信吾君は一瞬苦々しげに笑い、

「やっぱり夢に見ました」

とつぶやく。私もうなずいて「私も」と苦笑を返す。

春先は仲良く話す私たちをぎよつとした顔で見つめている。「俺の有紀ちゃんが変な男にたぶらかされて……」とつぶやきが聞こえたが、当然のこと、無視する。

そのまま二言三言言葉を交わした後、私は勉強に集中した。横から春先が「あの男とはどんな関係なんだよう」と懇願するような顔で肩をゆすつてくるが、反応しない。

そのまま試験が始まり、私は意気込んで答案用紙にペンを滑らせた。

試験はあっという間に終わり、二日間の試験が幕を閉じた。私は筆記用具を鞆に詰め込みながら、頭の中で答え合わせをし、悶々とした表情で席を立つ。同時に隣の席に座っていた信吾君も席を立ち、思わず目が合う。

「どうでしたか、試験」

信吾君が苦しげに笑いながら尋ねる。私は俯いて、

「力、出し切れなかった」

とつぶやく。

一瞬沈黙が流れたが、ふと信吾君の優しい笑顔が視界に映り、私は俯かせていた顔を上げる。

「どうですか、この後。喫茶店で一緒に勉強しませんか」

思わぬ申し出に、私は返す言葉が見つからずに口をぱくぱくと開閉させたが、「はい……」と熱くなった顔をうなずかせた。

横で、「俺の有紀ちゃんがあ」と頭を手で押さえながら春先が叫んだ。

私と信吾君は喫茶店に入り（春先は私を追う気力もないのか、がつくりと寂しげに肩を落としながら去って行った）、窓際の席に向かい合わせに腰を下ろした。

そこで少し会話をした後、勉強に移った。

一時間ぐらい経過した時、ふと信吾君がガラス壁の向こうの夜の闇を見つめて、「そろそろ帰りましょうか」とつぶやいた。

私はもう少しこの時間を味わっていたくて、名残惜しさに顔を俯かせたが、「はい」とうなずくと筆記用具を片づけ始めた。

二人で外に出ると、夜気が服の襟元にすべり込んできて、首を包み込んだ。私は思わずぶるっと体を震わし、ちらりと信吾君を見やると、彼は首にマフラーを巻いていた。

「寒いですね」

「うん」

私はうなずきながら、そっとコートの襟を胸の前に引き寄せて、上目づかいに信吾君の顔を見つめる。

彼とこのまま別れるのがさびしくて、その顔から視線が離せなかった。その無表情な白い顔が、誰にも手を触れられたことのない真っ白な人形のように清らかで綺麗で、私は真っ暗な背景の上に浮かぶ彼の顔をじっと切なげに見つめた。

すると、信吾君が私の視線に気づいたように振り向き、苦笑する。

「どうしたんですか。そんな寂しそうな顔をして」

「だって、せっかく再会できたのに、このまま別れちゃうのも寂しいじゃない？」

そう言うのと、信吾君は軽く声を上げて笑い、灰色のコートのポケットから携帯を取り出した。

「僕も同じことを思っていました。メアド、交換しましょう」

「うん」

私はそうつぶやいて、バックの中からピンク色の携帯を取り出す。携帯を差し向け合いながら、私はぼつりとつぶやく。

「やっぱり信吾君、変わってないね」

「どこがです？」

「言葉づかいがいつも、ですます調なところとか、妙に礼儀正しいところとか、優しいところとか」

「そういう有紀さんも変わってませんよ」

携帯電話の画面から放たれる白い光が、お互いの顔を淡く闇の中に浮き上がらせる。

「どんな風に？」

私は目を細めて、首を傾げる。

「お姉さんみたいに世話焼きなところとか。大人びた雰囲気とか」

「そうかしら」

私は肩を震わせて笑いながら、そっと携帯を鞆の中に仕舞いこむ。信吾君も懷に携帯を仕舞うと、歩き出しかける。

「それじゃあ、俺は歩いて帰るんで」

「うん」

私はうなずいて、顔の前でそっと手を振る。

信吾君は淡く微笑んでうなずくと、その水晶のように透き通った声で告げる。

「絶対、受かってやりましょう」

私はうん、とうなずき、彼に手を振り続ける。

信吾君は私の顔をもう一度じっと見た後、薄く笑って前を向いた。

その背中が遠ざかっていくのをぼんやり見つめながら、私は振って  
いた手を下ろす。

絶対受かってやるんだから。

そう心に決めて、私は背を向けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0437k/>

---

受験の日に君と再会して

2011年10月5日02時29分発行